都高時報

第30号
発行所
都大附高新聞部
編集責任者 中山[illegible]
印刷所 教育美術孔版

生徒大会

自由をつかむ機会をもて

〃前期自治活動の一般報告〃

生徒大会は、昨月二十九日三百十数名参加して、十一時三十分開かれた。議長に三Bの山田君を指命し最初に執行委員長の桑原君（三A）が執行委員が私的なことに力を入れすぎ、これがタイマンさとなってあらわれた」と報告を行った。この報告に対する反省が行なわれた。将方（三B）個人の責任を強くみた」高橋（昭）（三B）「全体に結びついた責任がなかった」桑原（三A）「都立の持っているルーズさを反省することが必要だ」高橋（清）（三B）個人の自覚が不足している」山田（三B）「防げとなる小さな問題をとりしまれ」宮下（三C）「小さな問題の責任と全校的問題の責任を結びつけて考える」山田（三B）「具体的問題を討論しよう」林（三B）「規則より自守的に守ろう」高橋（清）（三B）「来年はみな参加しよう」大内（三A）「時間をもっと守ろう」この様な討論の後に、自治委員長の河尻君（三C）より一般報告がなされ「記念祭を通じて都立の封建制がバクロされた。前期自治活動の主なるものに(イ)三浦、吉永両先生の授業問題、これに対し消極的態度が多かった。(ロ)原水爆禁止運動、国民的平和運動を反映してなかった。(ハ)碑文谷署事件、同題の発展を恐れる態度が見られた。(ニ)記念祭、学校生活がよく反映されていたが記念祭を通じ自治の弱さがあらわれた。この様な状態下の自治委員会の活動をみてみると自治会が生徒からういていた。このういていた基盤は自治会の問題がクラスの問題として消化されていなかったことである。我々は今、都立の自由をしっかりつかまえることが必要である。その為にはもっと機会[illegible]行動の中でまとまることを理解する。これが自治活動の大原則だと思う」と報告を行った。次いで自治委員長の[illegible]考のあいさつが行なわれた。金子（三B）「自治会の運営に自信がない。」[illegible]河尻（三C）[illegible]ん後サークルで活動したい」中山（三B）「新聞部を通じて活動していきたい」宮原（二C）「辞退したい」次いで桑原君より宮原君のすいせん演説があり、投票に入る。この時三Cの宮下君より「候補者の発表が遅い。もっと考える余裕がほしい」と発言があり、討論の結果賛成七六、反対一二九、で否決された。次いで飯田君（三B）より連合文化祭の説明があり、議長より別項の様に投票結果を発表した。

自治委員長に 宮原高君（2C）

投票総数三百十二票、河尻七九票、金子九二票、中山十七票、宮原百五票で後期自治委員長には二年C組の宮原高君と決定し、一時十五分生徒大会は散会となった。

主張

真の話し合いの機会をもとう

我々には一つの大きな問題が露呈されたと思う。それは都立の潜在しているルーズさが予想以上に大きなものであるということである。今迄都立の中に於ては平和とか自由とかいうものが声を大にして叫ばれて来た。けれども今こゝでふりかえって見るに我々は[illegible]たこれらの問題に[illegible]んできたのであろうか、文記念祭に対する参加の意欲についても、文水爆センターがいかにして生まれたのか知らないことについても都立生徒のルーズさというものが露骨にあらわれているではないか。・自治会が我々からういているということは都立のルーズさ[illegible]

思う。この責任は決して自治会にのみかかるものではないと思う。我々が今なすべきことは、この都立のルーズさというものを徹底的にあばくことである。H・Rに於ても意見が出ない。そして、自治会から出された問題についても真険な討論がなされない。まして我々の中から新しい問題などはされてこない。・自治会から出された問題を[illegible]と考える。この様なルーズさからは何等問題の発展はあり得ない。それ故それ[illegible]の同意を[illegible]つれ関心がうすくなり自治会がういてしまう様な現象になると思う。・碑文谷署事件等は、ある程度地味な討論がなされコウギという所まで行くにはいったが全般的にこれらの問題に対して積極的意欲は示されなかった。このようなルーズさ、そして都立の自由を見失ってしまったというより今迄口先だけの自由に終ってしまい自由というもの自体さえしっかりつかんでいなかった様な我々。この様な向[illegible]させなければ[illegible]ては来年の記念祭にも大きな影響を及ぼすことと考えられるのである。この問題を解決して行く為の具体的手段を考えねばならぬ、クラス一つを取上げてみても、真の友達というものが何人いるであろうか、多くの場合つきらない事を話し合う。そしてその様な話に於ての友人関係が気付かれているという事実、即ち真の話し合いが行なわれていないということ、これを打破してゆく為に、勉強会を発展させて行こう。この勉強会を通じて点をかせぐということより、むしろ人間的なものを作ってゆこうとする方向を見つけ出しそこにおいてルーズさという問題も批判され改められていくのではないか。この様なクラス単位の話し合いから全校的の話し合いそして他校との連帯性を深め話し合って行く為には、十一月に開かれる予定の連合文化祭も大きな意義を持つものだと思う。そういう意味で我々も積極的にこの文化祭に参加しようではないか。

学校生活を明るく

都学連

去る十月二十二日から三日間にわたって行われ、第一日の総会で今の学生の学んでいる状態が一体どのようなものであるか具体的に[illegible]は第二日の各分科会で補うことにした。二日目朝校で行われた高校生についての分科会には本校から二名出席し、そこでは今高校生の直面して[illegible]として授業と試験のみ[illegible]り、それが十分に話されない悩みへ孤立して勉強している。それに停学処分など学校から[illegible]というだけで訴えられないという事実等がたくさん出され、これに対しては各学校が少しづつ[illegible]める方向を出すと共に三日目の総会に報告することとなった。三日目総会は各分科会の報告のあと報告の中[illegible]討論し、今後は「クラスから出発してクラスに帰れ」の標語のように地道な話し合いで学校生活を明るくし、又[illegible]作るようにつとめ、常に確信をもって進もうと云うことが確認された。最後に「朝鮮[illegible]授業反対」「中ソ合同声明支持」[illegible]数項目の決議を行い、前回には見られぬもり上りをもって意義ある大会を終えた。

[illegible]て行く為の成果と云える。（大美、稲川ー中野）

芝000102000
郵20200300A
73

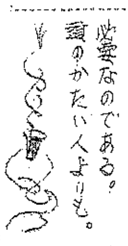
〃新しい盛上りを〃

二十八日連合文化祭

今年も多様な意城に於て、連合文化祭が開かれようとしている。今迄の様な、役員だけのものから、部・サークル等からの盛り上りにしようという新しい動きが出て来ている。この方向のもとに、交流・学生間の親睦のスローガンで、各々協議会が持たれ、各学校への呼びかけが行なわれている。十月二十五日に、実行委員会が結成され、十一月二十八日に行うことに内定した。内容は、展示、劇であり、又参加者による討議会やファイヤー等の催物をはかっている。財政は、参加費及主旨に賛成する諸団体の援助による。本校自治会の見方は、校内の活動を高める方が、先決問題でないか、又参加によって、部活動が活発になるだろうかという見方と、これによって、すべてを解決するのでなく、解決の一の手段として取ればよいという見方があるが全体として肯定的な態度をとっている。なんともあれ今後の成行が期待される。

野球部決勝

去る六日本校に芝商を迎え、本校野球部との間に試合が行われた。九人野球部員力つきた発揮し7A－3と快勝した。部員がガッチリと手を[illegible]あって良い部にし



★この度は部員の非常に少ない部が出て来た。最も極端なのが[illegible]この度芝商を破って大いに都立野球部の勇をあげたが、部員はたった十名。補欠なしという有様、一年の入部がなかった事が最大の原因で、この調子でいくと来年はどうなることやら、他人の事ながら心配である。我々新聞部でも今年の部員が少く困る様に活動も出来ない有様である。そうかと思うと新部員を一手に受けてホクホクの部もある。バスケット部などは一年の急成に熱心で、技術もかなり上昇した様だ。

★都立も大学受験難に伴って段々せちがらい風が吹き始めた。今年の東大等受験者数が三万人と予想され一次試験の足切りが行なわれるそうだから、無理のない事かもしれない。けれども一、二年の間位クラブ活動と勉強とを両立させる様な計画性がほしいものだ。余まりに受験にこだわるとスポーツも読書もクラブ活動も何も出来なくなって人間をねる今のチャンスを失ってしまうことになりかねないか。いかなる世に於ても弾力性のある人間が必要なのである。頭のかたい人よりも。

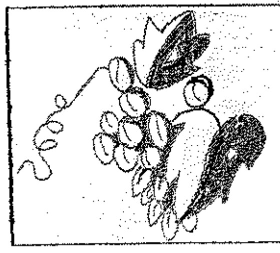
カメラと材料
何でも間に合う専門店
自由ヶ丘駅前

教科書と参考書の
[illegible]文堂
学芸大駅前

紙と文房具は
株式会社 津国屋商店
都大前通り

智識の導標
良書の店
千文堂
目黒パレス[illegible]前

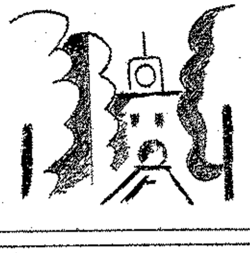
トケイとメガネ
安田時計店
都立大学坂下



自由と平和のために

都立の自治を守ろう

第六回記念祭を終つて



第六回記念祭は去る十月十五、六、七日の三日間に亘って行われ最終日のファイヤーを以ってその幕を閉じた。然し私達はハッキリ言ってどうにも仕様のない不満を残していた。それは直接には執行委員会やクラス、部の中心活動家の間で、記念祭なんて早く終ってしまえばよい、まるで試験のようだとの気持で現われ、一方一般生徒の間にも当日プロテニスを見に出かけてしまうような状態が現われている。本当に全生徒の明るく楽しい記念祭なんて思いもつかぬ状態ではなかっただろうか。なぜこんな面白くない記念祭になってしまったのだろう。私達はこの問題を真剣に考えねばならない。

自治の確立

ルーズさをなくそう

始め頃は十五日何の繰上げが非常に障害となって感ぜられた。確かに十五日の短縮は当務上多大の邪魔を生じた。その中で少数の執行委員が四苦八苦していた時に記念祭になってしまっていた。

反省会が記念祭後、開かれ、その席上で最も大きな論議の的と成ったものは記念祭がまったく全校的盛り上りなく行なはれた事と何故そうなってしまったかと云う事だった。そして今年の記念祭を最も特徴付ける事として都立高校の日常生活の怠慢さの反映という事があげられた。

考えてみると確かに都立日常のルーズさが積り積って今度の記念祭を物足りないものにしてしまったのだろう。ファイアーの時、何気に云われた「先輩の血で闘い取った自由を我々はそれに甘える事で帳消しにしている。」という言葉を本当に考えなければ今度の記念祭のやりきれなさは把握出来なかった。

学校側は徹底的に生徒側の不真面目な態度というものに治療の断を下すらしい。だけど我々は今年の記念祭の最大の収穫である所の、都立からルーズさを一掃しようと云う動きを自らの手でやりたいのだ。もしそれが出来なければ即ち都立自治の破滅への一歩を踏み出すことになるのだ。

単に旧制的沈うつな時代の記念祭へと形は変えてもその基礎となる我々自身の自覚が出来ていなかった時、記念祭は消耗となってしまうのだ。

反省会の時、校長の云われた「クラスサークルの個々の行事は上手く行って居た。が全校的雰囲気は零に等しかった。」と云う事は余りにも個人主義的な自己の生活を全体の為に変えられたくないと云う態度から出発している様に思われる。

統一という事は思想の一致ではない筈だ。団結ということだって自己の束縛は意味しない。民主とは自分の意思を押通すことではないのだ。自由とは放置しておくと云う事ではないのだ。

都立内部に瀰漫しているそう云った傾向を今年の記念祭を通じて見つめ直して寄与にしての人間の生活を成長させる契機としたい。

非常に後味が悪い記念祭であり、又反省でもあった。僕としてはつまらなかったとしか云い様もない三日間だった。又全てが僕の責任であるかのような反省だった。これが現実的思想に流されつつある。僕等の自覚となってくれゝば幸いである（二B浅輪雅夫）

準備を早く

記念祭の意義をもっと考えねばならなかった。義務の様に感じ、責任のみで記念祭に臨んでしまった。それで終った時にはほっとしたし、非常に疲れた。記念祭をもっと自分の物にしなければならない。又準備は早くやらねばならない。気持の上でもである（二B紙西協）

「新しいファイヤーに」

結局何も面白くなかった。何故って、一年生にしてみれば初経験だとかなんとか言って積極的じゃなかったし、事実記念祭の宣伝も足りなかったんじゃないかな、半月繰り上ったと言ってももっと早くから宣伝があれば何も影響はないと思える。実際に演研の劇なんかを見れば分るだろう。とにかく早くから準備に一年にはその気分を盛上げるようにしないと又今年みたいに何となくだれたものになるんじゃないかと思う。ファイヤーだって今年みたいならなくたっていい。むしろムダだ。もっと全く僕等のものにすることが必要だ。過去－現在－未来とファイヤーは続いているが、それがもっていないのなら進歩でないということだから下らない。過去の良い所は残して新しい時代にふさわしいファイヤーにすべきだ。それには先輩を尊敬する事は必要だがそれにこだわる事をなくする事もあると思う。来年はどうなるか分らないが、今年のようにはしたくない。（ⅠB　雨宮　正）

貴重な体験を得た

まず第一に記念祭は私自身の内部的な何物かを非常に大きく変えてしまったと思う。嘗って体験した事のない貴重な体験をここで得た。今迄の私の無知、視野の狭さ等をいやと言う程知らされると同時にあらゆる自分の行動に対して反省させられた。私達にとって初めての記念祭は全般的に満されたものは感じなかったが、個々の活動は楽しかった。一年生はもっと上級生あるいは一年生同志話し合う機会を持ち積極的に行動したいものだ。私は都立を進歩的であると考えていた。然しあのファイヤーの時の生徒、先輩達の気風は決して私の考えていたような物ではなかった。とにかく記念祭というものは恐しく物を考えさせる力を持っている。そしてその思考を新しく私の行動に持って行きたいと思う。

（ⅠC　網野尚子）

方向を自らの物に

三Bは記念祭に劇を選んだ。「全員で記念祭を作る」と話した。三年ということを考え猶更に相応しい物として皆が劇を採ったと思う。夏から続いて劇「樫の木」は記念祭の終りに完成した。此が劇其物としてより、真剣な学生々活を結晶する記念祭の組全体の仕事として行われたと言えるなら嬉しい。小さな楽しかった事を思う。子供の様に明るい皆の仕事の分担や背景紙張する男女の壮観、糊の刷毛を奪い合う時の心からの笑。困難、摩擦……其以上の良い物を沢山見せながら一つの仕事は終った。皆快く疲れた。

四年の最後様が今年記念祭をこう感ずるのは全くクラスを基にしてである。此が「学校全体の盛上り」云々の原因なのか？然し此の反省の生徒大会での号令を叫ぶのではなく夫々自らの物にして行く事―が総を解決すると思う。皆が結びついて一つの事を完成出来たように都立が一つになって素晴しいファイヤーを成けるのは確かだから、僕は心の隅で密にこう思う。（ⅡB　高橋昭八）

全員の無関心

まとまりのない記念祭だった。各生徒は執行委員にまかせっぱなし、かんじんの執行委員会は統制がとれず、三人の人のみ熱心だった。全員の盛り上りのないまゝむかえたファイヤーでは先輩との考え方の相違が目につくのみ、元気のない歌声は小雨と共に土に落ちた。こんな記念祭なら全然つまらないという声が多い。このつまらなさは、執行委員会の怠まんのせいと言うことは確だ。然しそれ以上に全員の無関心さから作り出されたものだ。

（ⅠB　井沢英二）

おわび　紙面不足の為、原稿割愛しました事、おわびします。

指導説明の不足

一年生の立場からみて―記念祭前はほんとうに記念祭とはどういうものか、疑問が大きかった。周囲の者もそうであった。こんな状態で参加してみてもの記念祭が終る最後まではっきりしない問題がいくつかあった。全体でプロテニスや映画その他ある時間だけ参加しなかった原因はこんなところにあるのではないか。劇にしろ最後のファイヤーにしろたいへん盛大で興味深かったものであったのだから記念祭前に上級生の指導、説明がゆきとどいていたならばもっとよかったのではないか。

（一A　田中　滋）

自治の欠陥

大きなことは僕等の自治の欠陥だった。学校側と僕等はいつのまにか対立するような関係になっていたことも

それに違いない。

記念祭反省の焦点がそこであっても、僕は二年生として一年生の失望を気にする僕である。昨年、僕等一年（木ぐらいの集団だったが）の感激は大きかったので、あの世界が新しい一年生の間に浸透することを望んだのである。確かに緊張した瞬間の連続である記念祭の一ヶ月に、僕等の多くは今迄になかった新しい力を感じたと思う。記念祭に自己の生活を投入することが犠牲であるならば、僕は皆んな誰れもが犠牲にならない。そして等しく犠牲を払う。そう云う創造への参加を思うのだ。

（ⅡB　田中敏雄）

東京都内高等学校
連合文化祭
演劇・展示、他

例年の如く今年も連合文化祭に皆で参加しようではありませんか。これを行うことによって普段出来ない他校との交流が行われる事と思います。いつも私達だけで生活している場合でなく、いろいろの学校の人達と日々を楽しみ合えたらどんなにうれしい事でしょう。

自治委員会としては前文の趣旨のもとに全校で参加しようという事になり、各クラス、サークルに働きかけています。なお、現在迄に美研の〝美術展〟と原水爆禁止センターの〝原水爆展〟の展示及び新聞部が当日に他校新聞部と共同して新聞を発行することにより参加することを決定しております。（十一月十三日迄に二十一校参加）

11月28日　於　学習院高等科講堂
国電目白下車

厚生会案内
調髪
洗髪付 100　調髪 80　丸刈 70
クリーニング
Yシャツ 20　ズボン 100
牛乳13円値下
御利用を乞う
購売部　通用門側別館内
食堂　本館内

孔版印刷は
技術の優秀な
サツキ会
印刷部へ
御注文は三A小川君まで

"都立高校のうぬぼれを捨てろ"

宮下保善

記念祭を見て感じた事は、展示に、今迄の様な自分達だけで楽しんでいる遊びから、水爆展、生物班を中心として、見る人への行届いた配慮が払われて来た事、又、劇の所要時間が平均し、内容も千差万別でなく、そろって日常生活に近いテーマが選ばれて来たことは今年の良い面と思います。然し講堂の設備を先輩に一任して済ましていたより、執行委員会の責任がはっきりせず、連絡なしに、一執行委員の一存で夜十一時過ぎから練習を始めたり、正規の手続なしに泊込が続出して、下校時刻の九時を守れなかった。だらしのなさは最大の欠陥です。殊に生徒側にこの状態に気付き、正そうとする者がいず、お蔭で教師がお目付役をしなければならなかったのは何といっても残念なことです。

記念祭を平和と自由を目標として、自主的なそして全校的な行事として進めて行く中で、昨年までは方針をくずすデカダンスとの積極的な斗いがありました。それが今年は、期日を半月早めた目的の討論も不充分で、執行委員自身もデカダンスに侵されていた訳です。旧制の観念性と独善こそデカダンスの温床であり、従って旧制では排除することが出来ず、新制で始めてこれと斗い、目標を具体的に発展させることが出来たので、今年のよい面も全て新制でこそ作り得たもので、ルーズさは旧制から残された最大の欠点です。もう旧制への幻想を追うことなく、新制として発展させているものに自信をもって進めるべきで、都立高校と云ううぬぼれは一掃すべきでしょう。その点自治委員会の甘い[illegible]校にある自由に甘えることなく、自由に伴う責任を自覚し、それを「自由を守る」という抽象的な題目でなく、行動として、連帯的に規律を守る日常の機会を積み上げてゆく方向は正しいと思います。確かに平和な希望ある生活、そして自由を求める声が世界中にまた日本中にあふれ、その可能性も明らかになり、その為に献身している国々また人達の様子がはっきり解って来た現在、学級としても毎日の生活にもっと考えて見る必要があります。

僕も記念祭でどなってしまいましたが、化学で実験を行うに必要な規律を守ってもらいたいのですが、着実に実行して行く[illegible]ずれてゆきます。実験を是非行うべきという要望を出しながら、それに必要なきまりは守られないのです。そのことが、科学として大切な慎重な行動ではなく、結果だけで満足する粗雑さになってしまいます。でもこれは余裕の少い時間内のことでもあり、全体の高校生活からは少し無理な要請で、余り注意して授業をいんうつにしてはいけないと思って遠慮してしまったのですが、自主的な記念祭にさえこのだらしなさが出るようでは、やはり間違っていたことを痛感しました。当番になっても班長だけにまかせて平気でおり、また班長も困りながらも一人でやってしまう状態になって、みかねて、皆でするように連絡すると、翌日「どうもすみませんでした」といいながらやって来るのです。何故教師にいわれる前に自分達で協同してやろうとしないのか、教師が干渉役にさせられるのではたまらないと思います。どんな仕事でも分担しあい、喜びも悲しみも共にする連帯性と計画性を進めなければと思います。それには学級全体に、もっと友好的な話合の場がつくられ、率直な批判が行われる様になり、常に連帯的に行動する訓練が必要です。そして些細な問題でも個人的な不満やあきらめに終らせず、行動として少しでも解決出来る様にしたいものです。

（本校教諭）

"まだ残るいやなくせ"

大石修平

今年辺りは、旧制的伝統の歪曲がもはや問題にならぬかと思ったらやはりあった。「都立」（都立高校は今日百以上ある）「燃やし続けた火」「自由」（何と！）聞くに耐えない経験内容で無恥で無智なことばだと思われた。もちろん、そんなロマンティシズムで、今日、学園生活をつらぬくことは出来ぬ，出来ないので、とまどったかたちでもあった。それで、記念祭が試験かなにかのようにつらいことにもなる。それはつらいはずだ。自然なことではないのだから、しかも手がっている心の抵抗は生かされていない。その表情はいらつて混迷している。妙なプライド、島国根性、鎖国性のようなものから解放されて、ひろぐと眼をひらくように努めよう。知識を求める要求を、一瞬のひまなく、ゆがみなく伸ばせ。友情と責任と規律の体制を作りだそう。

旧制高校の伝統とは何だろう。それは、右にあげたようなものにほかならぬ。いわゆる自由の条件とは何か。かつて、旧制中学が、軍国主義教育の、兵営につぐほどの、ことに下士官養成の機関として、ひどく歪められていたことの名残りからいくらかでも人間らしく自由でありうる点につきると思う。旧制校であっただけ、いやなくせの残りかすが少いことであるかもしれない。だけれども、それで、単純に「都立万才」というわけにはゆかぬ。いゝ気になるわけには参らぬ。

「十時半までコンパをすること、学校側頭として聞かず」「実力で残ったらどうします」「私達に帰っていただきたいと先生はいうのですか」「授業をやめてほしいという、私たちの要求を先生は[illegible]に伝えてくれましたか」（ユーモアではありません。実感こもった押問答の一部）これはいやなくせできたものだ。そんな要求とやらは、正しくないか、とるに足らないことだ。と私は思う。こういう「自由」（？）主義的坊っちゃんたちのお相手で、無駄な夜明しをして、校門を出た時、もう早い新聞屋の若者が町を駆けだしていた。その姿は、私の疲れた眼をひきしまらせた。同時に無量の、くやしさが私の胸にあふれたのだった。若たちにはわからないかもしれないが。私は感謝の思いをこめて、第六回記念祭の全体を回顧する。いや徹夜もなかなか愉しかった（？）それなのに又しても苦言が先になってしまったが、これはあの頃の私のどなりちらしの余波であり、結語であるとゆるしていただきたい。（本校教官）

"これから頑張ろう"

初日の朝、銅貨を手に想いを駄菓子屋に馳せる小さな子供達の様にはしゃいだ気持になって、柿の木坂を上っていった三年の或る男に学校から出て来たらしい二三人の連中が声をかけ、「どうも面白そうもないから逃んで来る」と言って駅の方へ姿を消してしまった。なんのく、そんなことはあるもんかと思いながら、彼は期待に満ちた足取りで、せかせかと、通用門を通り過ぎた。

とも角も、三日至った。

「駄目だなあ」しめくくりのファイヤーも終りに近づこうとしている時に、ため息と共に吐き出す様にこう言ったのは実に彼だったのである。どこが、食い足りない、砂糖を欲した一年生にサッカリンを与えたような結果になってしまったのではなかろうか。二年、三年とても五十歩百歩であろう。

今年の記念祭は、例年に較べて様々な面で条件が違ってきていた。開催を十五日間早くした事なども、大学の受験問題がのしかかって来ていることは一年生などにも充分察知せしめるのである。三年生は、最早、目前に迫っている受験という怪物の姿に脅えてしまって自分を見失いかけているし、それをまのあたりに見て、二年生は言いしれぬ不安の様なものを感じているのが現状ではなかろうか。だから、この記念祭に於て、殊にファイヤーの時に、皆が不断抱いている心のうさを思う存分に発散させてしまった。それだけに終ってしまったのではなかろうか。との念を禁じ得ないのである。勿論小さな成功は沢山有ったと思う。然し、残念なことに、その一つ一つが合致して、大きな統一的なものとしての方向へ行かずに、何か、[illegible]してしまったのではなかろうか。諸々の原因は、結る所理性の欠如にあると私は考える。理性は、我々を、より良く生きる様に[illegible]闘わしめるからである。然し、私は、決して悲観しているのではない。これから頑張ろうと、声を大にして、呼びかけるものである。

（三B　倉田英明）

私達の願いと

教育庁廃校を通告

すでに新聞その他の報道機関に依りて周知の通り都教育庁は都立朝鮮人学校の廃校を通告している。その理由書によれば、終戦後朝鮮人学校を都立に移管したのは「占領下という異常な社会情勢でやむを得ない暫定措置」であって元来都立学校によって外国人のための義務教育を行うことは極めて変則であり講和条約が発効した昭和二十七年四月二十八日以降は速かに朝鮮人子弟のための特殊教育も朝鮮人の責任と負担において行い、都立朝鮮人学校は廃止せられるべきであったにと述べ更に都立朝鮮人学校の運営にあたり[illegible]朝鮮人側の協力が得られず[illegible]して所期の成果をあげることができなかった」から廃校にするのだということである。

教育基本法第三条は「すべての国民はひとしくその能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないものであって、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって教育上差別されない」とうたってある。この基本法そのものは日本国民に対するものであるが、この条文の精神と在日朝鮮人が日本国民と等しく教育を受けられるということとは少しも矛盾するものではない。

又朝鮮人教師また[illegible]　[illegible]一体どのような成果を当局は期待したのであろうか？原水爆を禁止して世界の平和を望む私達の願いは朝鮮の人達の願いでもある。それは朝鮮の人達の集めた原水爆禁止署名が如実に示している。その人達の自国の平和を望む心と[illegible]い、自国の民族文化を守りたいという心からの希望をなぜいろいろな難くせをつけて踏みにじろうとするのだろうか。

都立は二位に

籠球七年制リーグ

昨七年制高校間の親睦と技術向上を目的とする五四年度七年制高校バスケット・リーグ戦は去る十一月三・六・七の三日間我が校体育館その他に於て熱戦をくり展げた。

三日　於本校体育館
第一試合
都立65—37学習院
第二試合
都立対成蹊
都立50—39成蹊
六日
都立対武蔵
於武蔵高
武蔵63—46都立
七日　於成城学園
都立44—37成城

全試合から全勝の武蔵が一位、都立は惜しくも二位となったが、全般的にバスケット部の技術面の向上は認められた。

いつも親切
司生堂薬局
毎度有難うございます
八雲小学校通り富貴屋前
電話 荏原(78) 三三六一

馬肥える秋!!
人も肥えるおいしい
つ久しのお菓子
大学前
つ久し
電(78) 七二四五

PHOTO STUDIO
岡田写真館
八雲小学校前
TEL(78) 七八八〇

私達の声を踏みにじる

「都大の重水研究」

〝水爆の原料、重水の製造工場が都立大学につくられようとしている〟と、赤その他で云われているが、一体どういうことなのか、をまとめてみた。〝民主々義科学者協会都立大学班編纂「民科ニュース」（第10月号による）

政府は先に二九年度二億三千七百万円の原子力予算を計上し、通産省に原子力予算打合せ会を設けて配分計画を行って来たが、今度同打合せ委員会材料部より、都文化学教室千谷教授あて総額約三千万円が重水製造研究費として配分されることに内定した。

千谷教授は教授会終了后、自分の研究は軍事研究でない旨弁解したが、特に他の教授からの意見が出なかったところがあたかも教授会がこれを承認したかの如くに評議会に報告されているという。又重水製造研究について「日本の水電解工場を全部動員すれば年9トンの重水がつくれる。これをアメリカに輸出して年約9億円の外貨を獲得する」といっていたが最近になって「重水を作ってアメリカに売る様なことはしない。アメリカでは重水は沢山あり、コストも安いから日本からわざわざ買う必要はないだろう。私は都立大で年約1トンの重水をつくり、これをインドあたりへ輸出したいと思う」と云って来た。ところが、そのすぐあとの学部長会議では「最初のプラントを民間会社で争い合っているので結局都立大でつくられることになった。当面は旭化成や昭和電工などで作った2%の重水を濃縮して99.7%の重水にし、年間1トンを生産する予定だ。五ケ年計画で大量生産の見通しがつけば民間に移管するが、その時には多分各会社の共同出資による重水の専門会社が出来ることになろう」といっている。

この変化、千谷教授の発言は何を意味しているのだろうか。

第一に、今度の原子力予算三千万円による重水製造研究は、文字通り、重水製造を如何に進めるかということのために予算が出ているので一般の研究者や学生が考えているように研究のためではないこと第二にこの日本で作られた重水はアメリカに売り渡され、水爆の原料となること。このことは重水をインドに売ると発言を変更したのもアメリカに売るならと反対した発言のあとのことであることが示されている。第三にこの発言によると都立大が重水工場の中心になること、旭化成、昭和電工が共同出資して重水製造会社を作る計画や東急で「原子力協力会」がつくられ多摩川の水を使って大規模な重水工場建設の準備が進められている。こと又東大、工大への千谷教授の働きかけがこれを裏がきしている。

一方こうした動きの中に、都立大の学生達の間では一週間に一度位至三度位各クラス等で討論が行われ初めている。しかし、多くの学生は主に、千谷研究室で行われつつある研究が軍事研究なのか否かまた、重水を製造することは平和的に利用できるから良い等の一般的な平和的幻想を強く持っていて、すでにこれは単なる重水製造研究ではなく、軍事的な重水工場を建てることが目的である事実を正しく理解していない。

今迄、民主々義科学者協会が中心になってこの問題について考えてきた。最近になって自治会も活動を開始しはじめたが、未だ全校的に関心をもってないのが現状である。

今後もあらゆる面でこれらの問題について話合いをもち、それらの問題を自治会に結集させ、ますますこの問題に対する全校生徒の関心を強めていく積りである。

20日に幻灯と討論

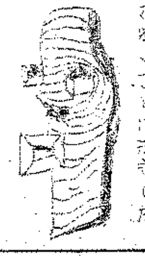
「千谷研」問題

センター

センターは記念祭まで低調気味であった原水爆展を一応成功させる事ができた。展示に対する感想文の中で、ある父兄は次の様に書いている。

「私達の悩みについてよく説明して下さいました。禁止の日まで頑張って下さい。」「水爆展にある人は、そのものの恐ろしさは良く分ったが、禁止の方法がはっきり出ていない」と批判している。このどうしたら禁止出来るかという点についてセンターでは、次の様に意見が一致した。

即ち被害者である日本人が、その切実な要求を自国の政府に示し、原水爆禁止の国際協定を結ぶよう働きかけそのような力まで国民の力を高める事がこれを可能にする唯一つの道である。八千万の署名は国民の力がすでに自国の政府が原水爆禁止協定を結ばなければならないような偉大な圧力なのである。しかしすでに集計された一五〇〇万はまだ〳〵、この為には不充分であろう。この点で例えばフランス国民が一貫してインドシナ戦争をやめるよう自国の政府に要求しこれが平和のために重要な貢献をした事が尊い教訓として考えられる。以上のような観点に立って、禁止センターでは具体的に校内、校外で幻灯会や懇談会を開き十一月二〇日(土)放課後千谷研の問題について幻灯と討論を行いそういう中から署名運動を飛躍的に拡大してゆくことに決定した。



国慶節と学生たち

―新中国見聞記―

小沢正元

かねてから聞いていたことであるが来て見ると、たしかに中国は青年の国である。

中国に老人がいないわけではないがいたるところの各機関で中心となって働いているのは青年だということである。おそらくどこの国であっても民主々義が徹底すればするほど中心となって活動する人々の平均年令はますます若くなるにきまっている。すでに建国五年の中国にそれがはっきり現われているのに不思議はないわけである。

十月一日、北京の天安門広場の国慶節典礼に、わたしたちのみたのは、まさしく、青年中国の象徴的なすがたであった。

まず陸海空三軍の行進である。朝鮮に十六ケ国連合軍を相手に健闘し、ついに一歩も国内にその侵入を許さなかった、志願軍はいうまでもなく中国の最も誇りとする青年たちである。それは閲兵式観兵式のための隊伍ではない。この人民の国を侵す者はいかなる強敵たりとも恐れず立ち向う責任感を鉄の如き規律に包んで、彼ら自ら選んだ指導者に対して無限の信頼と尊敬とをこめた敬礼を送っている堂々たる青年軍の行進である。

それから仂く人民たちの行進がつづく。仂く意志があれば必ず職場があり、いたるところ目につくはまず労仂者住宅と工場の新設であるが、それらの主人公たる労仂者、土地改革によって数千年来の隷の様な生活を一変して、人間らしい豊かな生活の喜びにひたる農民。全く男性と同じ権利を保証され、家庭と子供から解放された婦人。生活と就業を完全に保証されている学生等々それらの人民たちが、この解放をもたらした指導者に対してその喜びと信頼と尊敬の念を、今日この時、一斉に天安門の楼台に立つ毛主席に向って爆発させているのである。

その喜びが、天地をどよもす「万才」の叫びとなって、四時間つづく。

まさに天安門広場の国慶節典礼こそ、飢餓と恥辱と屈辱の旧世界から、自由、光明、進歩の新世界に生れかわった新中国の六億の人民の喜びを、北京の青年たちが、能うるかぎりの工夫をこらして世界の友人達の前に、示したものと思われる。

学生と語る

私達は中国で数ケ所の大学を訪門した。北京では人民大学、北京大学、民族学院、上海では復旦大学、広東では中山大学など。

人民大学や民族大学は特殊の目的をもった大学であるが、北京大学は綜合大学としての典型的な大学であって高名な経済学者馬寅初校長はじめ多数の教授たちと会談ののち、とくに日本語を専攻とする男女の学生諸君に話をきく機会があった。

中国の学生諸君は日本の学生の状態をきいて、日本の学生のおかれている環境を同情している。早く独立、民主、自由の日本となれば学生も幸福になるだろう。しかし、それまでにも、日本の学生達と友愛の握手がしたいと熱心に望んでいた。

中国の学生から受けた印象をいうならば、第一にみんな血色がよく、いきいきした眼つきで、いかにも楽しそうである。第二に、私たちと話す態度がいかにも率直で自然である。そこには校長や教授たちも同席された場合もあったが、固くなるようなこともなく、親しいおじさんに対するような親しみのなかに尊敬を失わない様子が見えた。

第三に、これは大切な点であるが、学生は中国の指導者、現在の政府をかたく支持している。

これらの態度は、もともと基本的に中国の新しい国家の構成と深いつながりがあるわけで、それが学生に豊かな生活を保証しているのである。大学へ入れば立派な宿舎があり栄養の高い食事がついている。家の事情でこずかいの送られない学生には、こずかいも支給される。だから中国にはアルバイト学生というものは一人もいない。また学生は卒業後の就職についての不安がない。学生の80%以上が技術方面であるが需要は増えるばかりで、大都市の郊外には例外なく大学専門学校が大規模にどしどし建設中である。

北京大学では、講義は午前中だけ、午后は主としてクラブ活動でその間に体育のためのスポーツとか、夏期には、二時間の午睡時間が組み込まれているという。夏休みは、七、八月両月でこの間にも日本の学生のようにアルバイトの必要は全然ないから、自由に自分の研究に没頭もできるし、旅行もできる。

学生たちは、解放前に、自分たちの先輩が、五四運動に以来人民の先頭に立ってどんなに苦労したかを知っている。現在の平和な幸福な生活が、そうした先輩の血の犠牲の上にうちたてられたものであることを知っているので、学生たちはいま技術を身につけ、教養をかさねて他日人民のために服務することを心から光栄に思っていることがよく諒解できた。

周恩来総理の言葉

この会見は今度の視察旅行の最も大きな收穫の一つであったが、こゝには、次の一節だけを紹介することにとどめる。

「皆さん、中国の人民は、独立をなしとげるのにどんな経験をもっているかと質ねるなら、お答えとしては「人民に頼る」という言葉だけであります。もちろん独立をなしとげるためには団結しなければなりません。またそのために奮闘しなければなりません。それならば、人民が団結して独立を達成する原動は何でしょうか、それは平和です。世界各国と平和的に共存するということです。独立して侵略をはじめるのではありません。中国人民はそのとおりやってまいりました。」

国慶節に列席し中国各地を視察した結果、わたしたちの確認したことは、いまや中国は世界の、とくに東洋のかたい平和のとりでとなっているということであった。

小沢正元氏は　月　日からおよそ　に渡って中国に招待され各地を視察した学術文化視察団員でした。本校一年小沢正実君のお父さん。特に寄稿を頼ったものです。

パン・ケーキ
旭ベーカリー
都立大学門前

生花
松可津
柿木坂郵便局前

主食はのんき屋のパンで楽しみましょう
疲労はのんき屋のお菓子で回復しましょう
のんき屋
宮前町 三二
八雲学園入口